

## 日本天文学会 早川幸男基金による渡航報告書 The Spitzer Science Center 2005 Conference

渡航先—アメリカ合衆国

期 間—2005年11月13-18日

秋とはいえ半袖を着た人が闊歩する、陽気で食べ物美味しいカリフォルニア州パサデナで開かれた The Spitzer Science Center 2005 Conference という会議に参加し、“Characteristics of the mid-infrared Spitzer/IRS spectra of seven nearby starburst galaxies” という題名で研究発表をしてきました。この研究会は、James R. Houck 教授の 65 歳の誕生日を記念して、“The Infrared Diagnostics of Galaxy Evolution” の研究を目的に開催された、参加者約 250 名、口頭発表 59 件、ポスター発表 112 件の大きな研究会でした。その内容は、主に現在活躍中の波長域  $3\text{--}40\ \mu\text{m}$  で撮像および分光観測が可能な Spitzer 赤外線観測衛星を用いた、銀河系内、近傍銀河、そして遠方 ( $z \leq 2$ ) 銀河のダスト、活動銀河核、および背景放射に関する理論・観測両面からの研究という多岐にわたるものでした。そのため、会期期間中の 3 日間、朝 9 時から夜 7 時までみっちり最新の赤外線天文学に浸かってきました。また本研究会中に、Spitzer 分光装置の開発者でもある共同研究者と顔を付き合わせての議論ができ、スペクトルの質を向上させる解析方法を具体的に教えてもらい、後日日本に帰って実践することができました。さらに、他の研究者の観測データを提供してもらえらることになり、結果的に私たちの論文の内容を充実させるこ

とことができました。また、研究会に参加することで、私たちが今まで試していなかった指標 ([FeII]  $26.0\ \mu\text{m}$ /[NeII]  $12.8\ \mu\text{m}$ ) でダストの破壊と生成プロセスを議論している研究を知り、私たちの研究でもその指標を使うことで、より深い議論ができるようになりました。研究会で知り合った研究者から共同研究の話も持ち掛けられ、将来の研究がますます楽しみです。

今回の渡航により、国外で開催された研究会へ初めて参加できました。そこで、女性研究者の多さを身に沁みて感じました。日本では全天文学研究者に対する女性の比率は約 1 割程度ですが、この研究会に参加していた女性の比率は約 3-4 割に上りました。そして Veronique Buat 教授、Brigitte Rocca-Volmerange 教授をはじめ、みなさん、子どもがおり、仕事も家庭も趣味も大切に思い、それらすべてがあって自分があるという姿に励まされました。また、海外の学生、ポスドクや、そして教授陣の擁する旺盛な好奇心、そして研究をとて楽しんでる姿に感銘を受けました。研究への熱い想いが喚起され、私もこうありたいという思いを強くしました。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えていただいた早川基金、ならびにその関係者のみなさまに心より感謝いたします。

田尻愉香 (京都大学大学院理学研究科)